

一番煎じ、ではない？

吉田 真人

書く材料を求め、久しぶりに映画に行った。

『メグレと若い女の死』

フランスの監督パトリス・ルコントの久々の作品である。同監督の作品は『仕立屋の恋』と『髪結いの亭主』を見ている。何れも1990年前後の作品で、海外出張の際に飛行機の中で、その後テレビでも見たと記憶している。共通のテーマは、男の静かな持続的情熱で、前者は利用された事が判明し、後者はユーフォリアの中で相方が身投げを計り、突然の終焉が訪れる。ハッピーからはほど遠い結末である。『髪結いの亭主』では北アフリカの楽曲が効果的に使われ、フランスと彼の地の浅からぬ関係が印象的だ。

今回の作品も静かな情熱を描いたものであるが、若い世代の再起を願う結末となっている。監督（1947年生れ）は、年と共に意固地さが増すタイプではなく、シニカルさが減じ柔らかくなるタイプとお見受けした。

『生きる、Living』

カズオ・イシグロの脚本による黒沢明『生きる』のリメイクで、舞台は1953年のロンドンである。バーリントン・アーケードやウォーターloo駅など懐かしい場所が出てくる。話の筋は黒沢作品とほぼ同じ。余命半年を宣告されたシニア官僚のウィリアムズは、自身の人生を見つめ直し変わっていく。大戦時の空爆で荒れたままの場所に、児童公園を整備すべく奔走する。

部下であった女性とフォートナム&メイソンで食事をとる場面があり、日本人観光客で溢れる前の同店の様子が珍しい。完成した児童公園のブランコに乗り、スコットランド民謡を歌うが、志村喬の「ゴンドラの歌」に較べ、朗々として上手すぎる。部下は彼をミスター・ウィリアムズと呼ぶが、字幕では課長と訳していて、しっくりこない。

イシグロは何を書きたかったのか。現代人に再生を訴えたかった？

両作品ともに多少は話題作だと思ったが、一般受けしないうらしく、あるいは平日の午後であったためか、座席はガラガラ。これでは経営が成り立たないのではないかと心配になる。

(2023年4月27日)